「撃剣」「剣術」から「剣道」への移行に関する史的考察

木下 秀明

Historical study of the process of change from *Kenjutsu* to *Kendo*

Hideaki Kinoshita

Abstract

This paper attempts to clarify the process of change from *Gekiken* and *Kenjutsu* to *Kendo* at the beginning of the 20th Century. The former two terms were widely used to mean swordsmanship with a bamboo sword. However, only the latter term is currently employed, despite the fact that it had been scarcely used at the time of the former two. At the end of the 19th Century, *Gekiken* was disliked by intellectuals because it marked a change from a real martial art to competition with a bamboo sword, and *Kendo* began to find favor instead of *Gekiken* even though the principle of *Kendo* had not been properly defined. In 1908, Shizuo Sakaguchi, a student, suggested that the concept of *Kendo* should consist of not only *Kenjutsu* training but also the mental discipline that is required for swordsmanship. However, his ideas did not gain immediate acceptance. In 1909, the Tokyo Higher Normal School changed the term *Gekiken* to *Kendo*, thus following the mainstream trend of adopting *Kendo* without any set idea of its content. Although in 1911 the Ministry of Education permitted *Gekiken* to be taught in secondary schools, the School intended to retain the term *Kendo* as a descriptor, and therefore it became necessary to properly define its content. Accordingly, Michiaki Nagai, the only professor of gymnastics at the School, emphasized the mental aspects of *Kendo*, as the suffix “-do” means “the way” for perfection of swordsmanship, as opposed to *Gekiken* and *Kenjutsu*, as the terms mean literally “hitting with” and “handling” a sword. The first special school for swordsmanship instructors was set up by the Ministry in 1911, and thereafter use of the term *Kendo* spread to all schools. The final aspect of this change of thought was the adoption of the term *Budo* instead of *Bujutsu*, meaning “martial art”, by the Great Japan Martial Virtue Association in 1919.

Key words : Tokyo Higher Normal School, Great Japan Martial Virtue Association, Michiaki Nagai, Sakaguchi Shizuo, Nishikubo Hiromichi, Takano Sasaburō
(Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 51: 33-48, January, 2006)

キーワード：東京高等師範学校，大日本武徳会，
永井道明，坂口鎮雄，西久保弘道，
高野佐三郎

問題の提起

今日では使用具に「道」をつけて「剣道」「弓道」、それらの総称を「武道」と呼ぶ。しかし、江戸時代には「武道」ではなく「武芸」「武術」と呼び、武器に「術」をつけて「剣術」「弓術」「馬術」と呼ぶのが一般的であった。その中で、主に竹刀術に過ぎない狭義の「剣術」は、「撃剣」とも呼ばれた。「撃剣」は、竹刀術全盛となった近代では「剣術」よりも一般的呼称となり、明治25(1892)年改正「尋常師範学校の学科及其程度」(原文カナ、以下ひらがなに統一)の「説明」(表1:2)^{注1)}以降、文部省は、当初用いた「剣術」(表1:1)ではなく、「撃剣」「柔術」を用いるようになった。文部省が「撃剣」「柔術」を「剣道」「柔道」と改称するのは、大正15(1926)年改正「学校体操教授要目」(以下「要目」、表1:85)で、「武道」を用いるのは昭和6(1931)年訓令1号からである。

このように、「撃剣」「剣術」から「剣道」への移行は案外新しい。

今日の「剣道」は精神的価値を強調する(井上, 1986)が、精神重視は文部省の「撃剣」時代に始まる。また、競技主体の竹刀術という点では、「撃剣」と「剣道」に本質的相違はない。

何時から、何故、「撃剣」「剣術」を「剣道」と呼ぶようになったのか。これが課題である。

中村(1985, pp. 18-19, 1994, 2003)は、日清・日露戦争後の「武術による攻撃精神の養成」強調の時代に、大正3年警視庁警察練習所で「武術」から「武道」への改称を提唱(表1:74)した西久保弘道が、大正8年大日本武徳会(以下「武徳会」)副会長兼武術専門学校長に就任する(表1:82)と、武徳会全規則中の「武術」が「武道」と改められ(表1:83)、「武術」専門学校が「武道」専門学校と改称(表1:84)されたことを挙げる。

中村(1985, pp. 275-281)が詳しいが、武徳会は、明治39年制定の「武徳流剣術形」(表1:24)に替えて、大正元年に「大日本帝国剣道形」

を制定(表1:69)している。それ以前でも、明治40年頃の体操科への武術採用論には「剣道」が出て来る(木下, 1965)。また、高野佐三郎は、大正4年に「剣道」が使われるのは「最近二三十年以来の事」(表1:80)であると述べている。

したがって、「撃剣」を含む「(剣)術」から「(剣)道」への移行は、明治後半から大正中頃迄の現象であると思われる。この間の「術」から「道」への移行の実状を明らかにすることは、「剣道」に代表される「武道」の近代化を把握する上で、必須の作業と考える。

そこで、本稿では、最初に学校剣道部の名称を指標として「撃剣」「剣術」から「剣道」への移行の時期を把握し、つぎに表1を用いて、「術」から「道」への移行に関する史実を展望し、最後に、「(剣)道」の提唱者と、その提唱理由の歴史的意義を明らかにする。

I 剣道部名称の移行時期

武徳会は、日清講和条約締結の明治28年4月17日に、軍事面での国家興隆の気運を背景に国粹的伝統の座をめざして設立された(表1:5)。剣道を中核とする武徳会は、民間団体であるから、学校剣道に直接関与できる立場ではなかったが、すでに「撃剣」「剣術」の名称で教科外活動として認知されていた中等教育以上の剣道に(表1:2)、各地の武徳会支部が関与したことは充分考えられる。

表2は、年度ごとの各『学校一覧』(不備・不足の場合は学校史)に基づいて、各学校毎に剣道部(副科を含む)が「撃剣」「剣術」等を部の名称としていた時期と、「剣道」部と呼称するようになった時期とを図示した年表で、下部に各年度毎の学校数を集計した。調査対象には、大学高専を主体に若干の中等学校を加えた。配列は、大学高専(公立優先)、師範学校、中学校の順とした。「撃剣」等は確認した最初と最後の年度を点線で、「剣道」は確認した初出年度以降を棒線で、制定・改称年度を縦棒で示した。空白は、特定できない年度である。

1. 図示の概観

学校間の改称年次の共通点を、学校の特性を考慮して検討すると、つぎのことが分かる。

①所謂「天下の東大、一高、一中」の改称が、伝統保守の老舗の暖簾のように、著しく遅い。

②高等学校の改称時期には学校差が目立つ。高校ごとの個性の反映であろうか。

③学習院（宮内省管轄）を含め、私立の大学専門学校は、何れも早い時点で改称している。

④東京高師の改称は、③の学校群に追随していると思われる（後述）。

⑤師範系での最初の改称は東京高師である。これは、高師を総本山とする師範教育の宿命で、例外はあるにせよ、府県師範が高師の改称をみてから動き出したことを意味する。

⑥「早稲田大学生の自称」を設けたのは、大学認知の名称が「撃剣部」の段階で、『早稲田学報』に「剣道部」記事が掲載されている（早稲田大学史編纂所、1981）からである。

⑦『学校一覧』等から特定できる部名び改称時期は、⑥からみて、既成事実を追認した制度上の時期である可能性が高い。

2. 学校数の概観

学校数の推移から、つぎのことが分かる。

①学校数は確認できた学校数に過ぎない。

②第四高等学校の明治34年の「剣道」への改称は先駆的事例で、改称が継続的に始まるのは、日露戦争（明治37—38年）の勝利が決定的となってからである。そして、殆どの学校が、大正10年頃までに「剣道」への改称を終わっている。

③日露戦争迄は殆どの学校が「撃剣」等を使用していたが、「撃剣」の使用は日露戦争後から減少し始めて、大正10年頃には殆ど見られなくなっている。

④したがって、「撃剣」「剣術」から「剣道」への移行期は、部名から判断すると、日露戦争後から大正10年頃までの約15年間の長期にわたることになる。

そこで、つぎに、この15年間の移行期に重点を置き、この移行が顕在化するまでの前史を勘案

して整理した年表（表1）に基づいて、「術」から「道」への移行に関係ある史実を概観し、その移行の過程で、理由を述べて「道」の使用を提唱した人物を指摘する。

II 「術」から「道」への移行過程

1. 系列ごとの考察

「術」から「道」への移行について、表1の系列ごとに考察すると、以下のことが分かる。

①「撃剣」「剣術」の学校採用に消極的だった文部省（表1：1，9）に議会が圧力を掛け（表1：17，22，31），明治44年に学校採用となった剣道の教材名「撃剣」は（表1：57），大正15年改正要目（表1：85）まで使用された。したがって、改正要目の「剣道」は、学校現場の「術」から「道」への移行に追随する形での採用であるから、文部省は「術」から「道」への移行に消極的であったと考えられる。

②嘉納校長のもとで「柔道」優先（表1：3，7，8，12）であった高師は、明治39年から「撃剣」を正課に加え（表1：21），明治42—43年に「剣道」と改称（表1：39，49，54）した。すると、師範校長会は、文部省の諮問が「撃剣」だけ（表1：51）だったにもかかわらず、諮問の「撃剣」を「剣道」と書き換え、しかも、諮問にはない「柔道」をも加えて答申（表1：52）した。その上、「撃剣」だけを諮問した文部省までもが、この「剣道」「柔道」からなる答申を地方へ通牒している（表1：53）。これらは、高師の「撃剣」から「剣道」への改称が、師範系だけでなく、文部省によっても受入れられたことを意味する。

ところが、文部省は、明治44年に「剣道及柔道」ではなく、「撃剣及柔術」の名称で学校導入に踏み切った（表1：57）。普通ならば、高師は、これを承けて「剣道」「柔道」を「撃剣」「柔術」と改称することになる。

しかし、高師は改称せず、「柔道」「剣道」を使用し続けた（表1：72，79）。これは異常である。加えて、同校体操担当教授永井は、「撃剣」（表1：44）から「剣道」使用（表1：58）に転じ、

表1 「撃剣」「剣術」「剣道」への改称過程に関する年表（系列別）、附出典

【凡例】1. 本表は、「柔道」を除く「道」の使用例と、「道」の使用例の該当機関等が「道」以前に使用していた用語（「撃剣」「剣術」「武術」が大部分）の例等を収集し、これらの事項を、「剣道」への移行には（東京）高等師範学校（以下「高師」と大日本武徳会（以下「武徳会」と）との観合が見逃せないという観点で系列化した年表である。
2. 系列は、①何れの系列にも属さず、しかも何れの系列にも影響力を有する議会と文部省（全段通し）、②師範教育の中核である高師（左欄）、③京都を本拠とする武徳会（中央）、④両者との関係が希薄な「その他」（右欄）に区分した。
3. 「剣道」（斜体文字）：表題には「剣道」とあるが、本文叙述では「剣術」「撃剣」など「術」を多用した記事の表題である。
4. 「事項番号」は、本文の「（表1：数字）」、および、本表末尾の「出典」の番号と同じである。

事項 番号	時 年 月	(東 京) 高 等 師 範 系	議 会, 文 部 省, 新 聞	大 日 本 武 徳 会 系	その他（両系列と関係希薄）
1	明治 16. 05				
2	25. 07	文部省が「剣術柔術等教育上利害適否調査」を体操伝習所に指示（17年10月報告は体操実施困難な場合に限定して採用）			
3	26. 09	文部省令改正説明が「日課外に於て便宜滑稽術柔術撃剣等を練習せしむるが如きも亦有益」と、副科・部活動を勧奨する			
4	27. 02	嘉納治五郎が高師校長となり、「柔道」を奨励			
5	28. 04				
6	28. 09				
7	29. 03	高師運動会が「柔道部」「撃剣及び銃槍部」を組織			
8	30. 04	高師「柔道」指南囑託に横山、「撃剣指南」なし			
9	31. 06	文部省が教科外の「柔術／道？」「撃剣」を許容する通牒			
10	31. 07				
11	32. 01	高師「撃剣」「授業囑託」に木村			
12	32. 06	高師体操専修科副科に「柔道又は撃剣」を加える			
13	32. -				
14	33. -				
15	35. 06				
16	37. 07				
17	38. 02				
18	38. 10				
19	38. 11				
20	38. 12	永井が欧米留学に出発			
21	39. 01	文科兼修体操専修科「体操」に「柔道又は撃剣」採用			
22	39. 03	衆議院が「体育に関する建議案 政府は宜しく中学程度以上の諸学校に体育正科として剣道柔道を加ふべし」を僅差で否決			
23	39. 05	衆議院が「剣術、柔術」を随意科に採用する建議を積極的に修正して可決する			
24	39. 08				
25	39. 11				
26	39. 12				
27	39. 12				
28	40. 06				
29	40. 09				
30	40. 12				
31	41. 03				
32	41. 04				
33	41. 04				
34	41. 04				
35	41. -	高師「撃剣」「講師」に高野、「囑託」に木村他			
36	41. -	高師が「本校の型」（後の「五行の形」）を制定			
37	41. 10	戊申詔書が日露戦後の国民精神作興を意図して「光輝ある国史の成跡」を喚起する			
38	42. 02				

龍手田が撃剣試合の実情を批判、是正を求める

大日本武術講習会設立

「運動界」が河田遺稿の表題に「剣道」

四高校友会「剣術部」が「剣道部」と改称

坂口が内藤に接して「剣術」と「剣道」の別を実感
「剣道柔道」を加ふべし」を僅差で否決
学習院「剣道科規則」制定

早大「撃剣部」坂口が視勝会答辞に「剣道部選手総代」

「運動の友」(牛込区若松町)が「剣道」の研究」連載
「東京学生連合剣道会第1回大会番組」
「東京にて各大学生・・・撃剣会を組織・・・」

坂口「私設剣術道場に就て」
坂口「剣道教師に望む」

「運動世界」1号目次に「剣道界」欄
「各学校の剣道教師」一覧14校中6校は「撃剣部」
坂口「剣道講話」

「東京学生剣道会第2回演武大会」8校中3校は「撃剣部」

39	42. 初	高師校友会「撃剣部」が「剣道部」と改称 永井が「普通体操」教授となる（42年1月帰国）																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
----	-------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

〔表 1. 出 典〕

〔凡 例〕1) 編著者の「高等師範学校」は「高師」, 「東京高等師範学校」は「東京高師」と略した。
2) 官庁, 学校の刊行物は, 市販本ではないので, 発行所, 発行地は記載しない。

- 1) 文部省 (1883) 文部省第 11 年報. p.17, p.916.
- 文部省 (1884) 第 12 年報. p.3.
- 2) 文部省 (1892) 文部省令 8 号説明「教育史編纂会 (1938) 明治以降教育制度発達史 3. 教育資料調査会: 東京, p.633」
- 3) 東京文理科大学・東京高師 (1931) 創立 60 年. p.45, p.240.
- 4) 無記名 (1894) 籠手田新潟県知事の談話. 文武叢誌 4: 52-53 [木下秀明 (1970) スポーツの近代日本史. 杏林書院: 東京, pp.69-70]
- 5) 中村民雄 (1985) 史料近代剣道史. 鳥津書房: 東京, p.28, p.30.
- 6) 中村民雄 (1985) 史料近代剣道史. 鳥津書房: 東京, p.31.
- 7) 高師 (1897) 高等師範学校一覧 自明治 30 年 4 月至明治 31 年 3 月. p.113. 東京高師 (1911) 東京高等師範学校沿革略志. p.51.
- 8) 高師 (1897) 高等師範学校一覧 自明治 30 年 4 月至明治 31 年 3 月. pp.157-165. 同 (1912) 東京高等師範学校一覧 自明治 45 年 4 月至明治 46 年 3 月. p.68 / 31.
- 9) 浜田義明 (1939) 学校体育運動に関する法令並に通牒. 目黒書店: 東京, p.201.
- 10) 河田景興 (1898) 剣道. 運動界 2 (7): 20-21.
- 11) 高師 (1901) 高等師範学校一覧 自明治 34 年 4 月至明治 35 年 3 月. p.195. 東京高師 (1912) 東京高等師範学校一覧 自明治 45 年 4 月至明治 46 年 3 月. p.68 / 34.
- 12) 高師 (1899) 高等師範学校一覧 自明治 32 年 4 月至明治 33 年 3 月. p.97.
- 13) 中村民雄 (1985) 史料近代剣道史. 鳥津書房: 東京, p.39.
記者 (1899) 日本武徳会: 大日本武徳会紀要. 運動界 3 (7) 12-15.
- 14) 第四高等学校 (1900) 第四高等学校一覧 自明治 32 年至明治 33 年: p.168. 同 (1901) 第四高等学校一覧 自明治 33 年至明治 34 年: p.182.
- 15) 庄子宗光 (1970) 改訂増補剣道百年. 時事通信社: 東京, pp.42-43.
- 16) 坂口鎮雄 (1907) 余が剣士としての経験. 運動の友 2 (2): 48-53.
- 17) 星野仙蔵 (1905) 体育に関する建議案. 官報号外 明治 38 年 2 月 8 日: 197, 19 日: 276.
- 18) 学習院 (1905) 学習院一覧 自明治 38 年 9 月至明治 39 年 8 月. p.63. 建文館: 東京, p.32.
- 19) 文部省 (1906) 普通教育に於ける体操遊戯取調報告. 官報 1 月 15 日附録.
- 20) 永井道明 (1935) 余が 68 年間の体育的生活並にその感想 師範大学講座体育 5. 建文館: 東京, p.24.
- 21) 東京高師 (1908) 東京高等師範学校一覧 自明治 41 年 4 月至明治 42 年 3 月. p.98.
- 22) 星野仙蔵外 8 名 (1906) 体育に関する建議案. 官報号外 明治 39 年 3 月 14 日: 282-283.
- 23) 無記名 (1906) 体育部祝勝会. 早稲田学報 134: 56.
- 24) 無記名 (1906) 武徳流剣術新形制定. 武徳誌 1 (3): 58.
- 25) 眠剣生 (1906) 剣道の研究. 運動の友 1 (1): 1-2.
- 26) 全国茗友会 (1997) 教育剣道を培った人々. いなほ書房: 東京, pp.284-285.
- 27) 無記名 (1907) 撃剣会長と大学生の禁酒. 武徳誌 2 (1): 65.
- 28) 内藤高治 (1907) 剣道初歩 (第 1, 2, 3 回). 武徳誌 2 (6): 49-51. 2 (7) 60-62. 2 (9) 48-51.
- 29) 坂口鎮雄 (1907) 私設剣術道場に就て. 武徳誌 2 (9): 74-77.
- 30) 坂口鎮雄 (1907) 剣道教師に望む. 武徳誌 2 (12): 79-80.
- 31) 星野仙蔵外 (1908) 体育に関する建議案. 官報号外, 明治 41 年 3 月 15 日. 25 日.
- 32) 無記名 (1908) 目次. 運動世界 1.
- 33) 無記名 (1908) 各学校の剣道教師. 運動世界 1: イノ 10-11.
- 34) 坂口鎮雄 (1908) 剣道講話. 運動世界 1: 47-49. 2: ろノ 11-13. 4: 37-40.
- 35) 東京高師 (1908) 東京高等師範学校一覧 自明治 41 年 4 月至明治 42 年 3 月. p.204.
- 同 (1912) 東京高等師範学校一覧 自明治 45 年 4 月至明治 46 年 3 月. p.68 / 45.
- 36) 中村民雄 (1985) 史料近代剣道史. 鳥津書房: 東京, p.276.
- 38) 全国茗友会 (1997) 教育剣道を培った人々. いなほ書房: 東京, p.287-288.
- 39) 東京高師 (1909) 東京高等師範学校一覧 自明治 42 年 4 月至明治 43 年 3 月. p.319.
- 40) 東京高師 (1912) 東京高等師範学校一覧 自明治 45 年 4 月至明治 46 年 3 月. p.68 / 28.
- 永井道明 (1935) 余が 68 年間の体育的生活並にその感想 師範大学講座体育 5. 建文館: 東京, p.32.

- 41) 無記名 (1909) 範士年金贈与手続. 武徳誌 4 (4) : 75.
- 42) 無記名 (1909) 財団法人設立. 武徳誌 4 (7) : 66.
- 43) 無記名 (1909) 範士教士の称号授与. 武徳誌 4 (7) : 71.
- 44) 永井道明 (1909) 中学校の体操に就て. 教育時論 876 : 8.
永井道明 (1909) 中学校に於ける体操, 遊戯, 擊劍及柔道. 帝国教育 328 : 14-15.
- 45) 柳多元治郎 (1909) 剣道教授綱目. 武徳誌 4 (9) : 43.
無記名 (1910) 剣道研究会の組織. 武徳会誌 1 : 71.
- 46) 宮本武蔵著, 三橋鑑一郎註 (1909) 剣道秘要 附録武蔵実伝二天記. 武徳誌発行所 : 京都.
- 47) 無記名 (1910) 武徳会誌発行に就て. 武徳会誌 1 : 15.
- 48) 武道専門学校剣道同窓会 (1984) 大日本武徳会武道専門学校史. 同会 : 京都, pp.79-80.
- 49) 東京高師 (1910) 東京高等師範学校一覽 自明治 43 年 4 月至明治 44 年 3 月, p.204.
- 50) 内藤高治 (1910) 随問随答. 武徳会誌 4 : 91-93.
- 51) 52) 無記名 (1910) 師範学校校長會議. 教育時論 905 : 33-34.
無記名 (1910) 全国師範学校校長會議. 教育学術界 21 (3) : 109-111.
- 53) 浜田義明 (1939) 学校体育運動に関する法令並に通牒. 目黒書店・東京, pp.227-228.
- 54) 東京高師 (1910) 東京高等師範学校一覽 自明治 43 年 4 月至明治 44 年 3 月, pp.109-111.
- 55) 小関教政 (1910) 剣道要覽. 大日本武徳会山形県支部 : 山形.
- 56) 内藤高治 (1910) 剣道修業に就ての心得(上, 下). 武徳会誌 9 : 57-61. 10:61-65.
- 57) 文部省令 25 号 (1911) 高等中学校規程.
文部省令 26 号 (1911) 中学校令施行規則中改正.
文部省令 15 号 (1912) 師範学校規程中改正.
- 58) 永井道明 (1911) 体操科講習筆記. 私立岡山県教育会 : 岡山, p.36.
- 59) 文部省告示 235 (1911) 師範学校中学校高等女学校教員等第 3 回講習会.
- 60) 杉山清作 (1912) 心身鍛練 文部省第 1 回擊劍講習録. 同人 : 伊丹, p.一.
- 61) 東京高師校友会 (1911) 本校創立 40 年記念校友会發展史 [中村民雄 (1985) 史料近代剣道史, 鳥津書房 : 東京, p.276]
- 62) 柳多元治郎 (1911) 剣道範範. 宝文館 : 東京, pp.11-12, p.20, p.25.

- 63) 無記名 (1911) 剣道型の争 - 文部省派と武徳派. 朝日新聞 11 月 8 日.
- 64) 杉山清作 (1912) 心身鍛練 文部省第 1 回擊劍講習録. 同人 : 伊丹, pp.41-98.
- 65) 杉山清作 (1912) 心身鍛練 文部省第 1 回擊劍講習録. 同人 : 伊丹, pp.103-112.
- 66) 67) 市川阿蘇次郎 (1932) 大日本帝国剣道形の由来とその使命. 右武会会誌 23 [中村民雄 (1985) 史料近代剣道史, 鳥津書房 : 東京, pp.286-289]
市川阿蘇次郎 (1932) 大日本帝国剣道形の由来とその使命. 武徳 1 [大矢彦、堀毛孝之 (2002) 日本剣道形の由来と解釈 : 大日本武徳会剣術形について (1). (国際武道大学) 武道・スポーツ科学研究所年報 7 : 265-267]
- 68) 武道専門学校剣道同窓会 (1984) 大日本武徳会武道専門学校史. 武道専門学校剣道同窓会 : 京都, p.92.
- 69) 中村民雄 (1981) 近代武道教授法の確立過程に関する研究 (2) : 「形」の制定について. 武道学研究 13 (3) : 16.
- 70) 永井道明 (1913) 覚醒すべき我国民の体育問題. 実業之日本 16 (1) : pp.147-148.
- 71) 文部省訓令 1 号 (1913) 学校体操教授要目.
- 72) 東京高師 (1913) 東京高等師範学校一覽 自大正 2 年 4 月至大正 3 年 3 月, p.25
ノ 1.
- 73) 高野佐三郎 (1913) 青年と剣道の必要. 体育 237 : 7-10.
- 74) 西久保弘道 (1914) 武道講話 (二). 警察協会雑誌 172 : 18.
- 75) 76) 77) 渡辺一郎 (1987) 大正 2 年 1 月学校体操教授要目 (抄)・大正 3 年 9 月大日本武徳会規則改正等・東京高等師範学校本校諸規程 (抄)…, 同人, pp.10-12.
- 78) 永井道明 (1914) 序 [高野佐三郎 (1915) 剣道. 剣道発行所 : 東京, p.15]
- 79) 東京高師 (1915) 東京高等師範学校一覽 自大正 4 年 4 月至大正 5 年 3 月, p.22
ノ 8.
- 80) 高野佐三郎 (1915) 剣道. 剣道発行所 : 東京, pp.251-252.
- 81) 根矢鹿児 (1918) 現代の弓道. 泰山房 : 東京.
- 82) 中村民雄 (1994) 剣道事典 - 技術と文化の歴史. 鳥津書房 : 東京, p.126.
- 83) 中村民雄 (1985) 史料近代剣道史. 鳥津書房 : 東京, p.53.
- 84) 大日本武徳会沿革史 [武道専門学校同窓会 (1984) 大日本武徳会武道専門学校史. 同会 : 京都, pp.106-107]
- 85) 文部省訓令 22 号 (1926) 「大正 2 年文部省訓令第 1 号学校体操教授要目」改正.

表2 各学校別剣道（部）名称推移年表

〔凡 例〕

1. 学校名は初出の「学校一覧」の名称とした。改称後の学校名は（ ）内とした。
2. 「剣道」以外の部名（副科を含む「撃剣」等）は当該年度に（…）で、「剣道」は当該年度に（―）で示した。
3. 制定および改称された年度は縦棒（|）で示した。
4. 空白の年度は、部名不明（学校設置以前および部組織以前を含む）を示す。
5. 「学校一覧」は、記載項目も形式も学校差があり、校友会関係記事を記載していない学校も多い。

	明治										大正										年									
	→	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	2	3	4	5	6	7	8	9	10	→						
<大 学 高 専>	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
東京帝国大学	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
京都帝国大学	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
第一高等学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
第二高等学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
第四高等学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
第五高等学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
第七高等学校造士館	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
東京高等商業学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
神戸高等商業学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
長崎高等商業学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
上田蚕糸専門学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
東京外国語学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
商船学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
学習院	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
慶應義塾	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
東京専門学校（早稲田大）	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
（早稲田大学生の自称）	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
台湾（東洋）協会専門学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
<師 範 学 校>	→	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	2	3	4	5	6	7	8	9	10	→						
東京高等師範学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
広島高等師範学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
青森県師範学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
岩手師範学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
東京府青山師範学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
滋賀県師範学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							
京都府師範学校	→	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	→							

[illegible]

[出典] 典拠とした「学校一覧」(国立国会図書館蔵、欠本多数)は省略した。

(第1高等学校)『校友会雑誌』(明治40) 165-p.101

『学習院第三年報』明治12, p.2

『五高五十年史』開校50年記念会, 昭和14, p.439

『慶應義塾五十年史』明治40, p.380

『向陵誌』第1高等学校寄宿寮，大正14，p.367，p.371

『濟々費百年史』百周年記念事業会, 昭和 57, p.185, p.264, p.287, p.323

『滋賀県師範学校六十年史』昭和10, p.15

『台湾協會會報』(明治38) 77-p.44, 78-p.42

(東京文理科大学・東京高等師範学校)『創立六十年』昭和6, p.400

『東京大学百年史 通史1』昭和59. p.905

『東京府立第一中学校創立五十年史』昭和4, p.125

『早稲田大学百年史2』昭和56, p.555

『早稲田學報』(明治30) 2-p.122, (明治38) 115-p.53, 118-p.64, 121-p.66, 125-p.71, (明治39) 134-p.56, (明治44) 191-p.7

同年文部省講習会において「撃剣及柔術」を「剣道及柔道」と改称すべきであると提唱した（表1：64）。この経緯からみて、高師は、「撃剣」を「剣道」と改称する形での「術」から「道」への移行に極めて積極的であったと考えられる。

③設立当初の「武徳会規則」にある「武術」と「武道」（表1：5）の異同は定かでないが、「武術を鍛練して武徳を涵養」とある「武徳会紀要」（表1：13）では、一切「道」を用いず、「剣術」その他すべて「術」を用いた。この武徳会の基本的概念である「武術」と「武徳」は財団化後も継承されるから（表1：42）、武徳会では、「武徳」とまぎらわしい「武道」、したがって「剣道」の使用は極力避けていたと考えられる。

また、「中等学校以上の武術教員たるは勿論兼ねて倫理、歴史等の教員資格をも得て武道師範たるの使命を全ふせしめんとす」（表1：48）^{注2)}をみると、武徳会では、「武道」を「武術」の上位概念に位置づけていたことが分かる。さらに、「武術家優遇例」が「品行方正」で「精錬証」を受け、かつ「武徳祭演武大会に於て武術を演じたる者」を教士、丁年（成人）後40年以上「武術を鍛練」した「模範」的な「功劳」ある高齢者を範士として（表1：15）「剣道教士」「剣道範士」の称号を与えたこと（表1：43）、「剣道」を称号以外では使用しなかったこと（表1：41）からみて、「剣道」が「剣術」だけでは到達できない価値ある存在であったことが分かる。

したがって、「剣道」と「剣術」とは同義ではなかったから、武徳会が「術」から「道」への移行に積極性を示す筈はなかったと考えられる。

しかし、武徳会機関誌の編集者は、書名や記事の題名に「剣術」に替えて「剣道」を使用（表1：28）している（後述）。これは「術」から「道」への移行という趨勢の反映であろうが、これによって、武徳会では、上位概念である「剣道」と下位概念である「剣術」とが同義であるかのような混乱を呈することになる。

その後、武徳会では、高師との学校剣道の形についての主導権争い（後述）が発端となって、大正元年に「剣術形」（表1：67）を「剣道形」（表

1：69）に改めた。しかし、「術」から「道」への移行には、依然として消極的だったようで（表1：75, 76, 77）、「道」が「術」を駆逐する形で、「術」から「道」への移行が完結する（表1：83, 84）のは大正8年のことである。

④早稲田大学「撃剣部」の学生が「剣道部」を名乗っていた（表1：23. 無記名, 1905）ように、「術」から「道」への移行は東京の大学高専剣道部員間の関心事（表1：25, 26, 27, 33, 38）で、大会名など（表1：26, 32, 33, 38）には「撃剣」でなく「剣道」が使用された。「撃剣」と呼ばれる竹刀術が「剣道」とも呼ばれるようになったのであるから、「術」から「道」への移行は、東京の学生部員によって、部名の改称と併行して進展したと考えられる。

2. 総合的考察

「術」から「道」への移行について、表1を総合的に考察すると、以下のことが分かる。

①競技主義化した竹刀術である「撃剣」に対する当初の批判（表1：4）は、「撃剣」の名称変更までは視野になかったが、「武徳会」が精神性を想起させる抽象的名称を採用した（表1：5）ように、技術色の濃い「撃剣」よりも、精神性を連想させる「剣道」（表1：10, 14）への移行に及んだ。

②その中で、日露戦争後に「撃剣」を「剣道」に置き換えたのは東京の大学高専の学生部員で、「撃剣部」と「剣道部」が一場に会した竹刀競技会を「剣道会」（表1：26, 38）と称した。

③その一人、早稲田大学部員中の代表格（表1：23）で論客であった（表1：29, 30）坂口鎮雄は、卒業後、明治41年に「剣道講話」（表1：34）を発表した。彼の学生時代の経験談によると、「剣術」に幻滅を感じた彼は、「剣術」の上位概念に価値を見出し、これを「剣道」と呼んでいる（表1：16, 後述）。

④学生の「剣道会」に参加していた高師「撃剣部」は、明治42年に「剣道部」と改称した（表1：39）。高師内で「柔道」部に遅れを取ってきた「撃剣」部（表1：3, 7, 8）は、「撃剣」を避

けて「剣道」を用いる「剣道会」の気運を背景に、「剣道」部への改称を実現したのであろう。これを契機に、翌43年、高師は正科でも「撃剣」を「剣道」と改称する（表1：49, 54）。

⑤したがって、②，③，④を総合すると、明治42年の高師での「撃剣」から「剣道」への移行の論拠に、明治41年の坂口「剣道講話」を据えることも可能となろう。

⑥明治38年、議会は「剣道」「柔道」の学校採用を僅差で否決（表1：17）したが、翌39年には「剣術」「柔術」採用を可決（表1：22）した。これに呼応するかのように、高師は体操専修科の「柔道又は撃剣」を副科から正科に格上げし（表1：21）、武徳会は「武徳流剣術形」を制定した（表1：24）。ともに、剣道の学校導入に不可欠の施策で、学校剣道の主導権確保が念頭にあったと思われる。

⑦高師は、その後明治41年に「撃剣」担当教員を増強（表1：35）し、高師の形を制定（表1：36）した。後者は武徳会の形と競合するが、学校教育の総本山を自認する官の高師が、学校剣道の主導を決心したのは当然である。そのため、高師は、教材名でも既存の「撃剣」「剣術」を捨てて、学生が関心を示す呼称である「剣道」での統一（表1：39, 49, 54）を意図したのではなかろうか。

⑧これに対し、民間団体とはいえ、武道界の全国統一に先鞭をつけてきた武徳会も、遅ればせながら指導者養成に着手し、明治43年に京都府認可で設立した武徳学校（表1：48）を45年に文部省認可の武術専門学校に昇格させた（表1：68）。

⑨この高師と武徳会の主導権争いが顕在化するのには、嘉納高師校長が、明治44年「撃剣及柔術」の体操科採用（表1：57）にともなう文部省講習会に、独自の形を採用すると発言したこと（表1：61）である。この発言は、武徳会の「剣術形」を否定することを意味する。当然、両者の決定的対立を招き、「形の争」（表1：63）として顕在化したのである。

⑩もちろん、文部省講習会を掌握した高師の優

位は動かない。そこで、武徳会は、「剣術形」の再調査（表1：67）に高師の参加を求めて（表1：66）妥協を意図した。しかし、その結末は、実のみならず、「剣術」の名まで高師の「剣道」（表1：69）に譲らねばならなかった。

⑪この過程で「撃剣」を「剣道」と改称すべき理由を述べたのは、明治44年文部省講習会で「体育理論」を講じた高師普通体操担当教授永井道明だけ（表1：64）である。「剣道理論」担当の根岸信五郎と、事実上「剣道理論」を講じた高野佐三郎は、「術」と「道」を別の概念と捉えている（表1：65。木下，2005）。したがって、「撃剣」から「剣道」への移行の手がかりは、永井以外には考えられない。彼の改称理由表明の場が文部省講習会であったことを考えれば、文部省が「撃剣及柔術」を教材名に採用した（表1：57）にも拘わらず、「剣道」「柔道」が学校現場へ伝搬定着していくことは疑う余地がない。

⑫この講習会で、高野は省令の「撃剣」に言及する時だけ「剣道」を口にした。しかし、講義では、「剣道」を使わず、「武道」と「武術」を目的と方法の関係で用いた。したがって、両者は基本不可欠の別概念（表1：65）であった（木下，2005）。ところが、高野は、数年後には「剣道」だけを用い、「術」と「道」に言及しなくなる（表1：73, 80）。高野は永井に追隨したのである。

⑬西久保弘道は、高野が「剣道」だけを使うようになったのと同じ頃、「武術」から「武道」への改称を提唱し（表1：74）、やがて「剣道形」制定で威信を失墜していた武徳会再建に際し（表1：82）、「術」と「道」が混在していた武徳会（表1：75, 76, 77）を「道」で統一する役割を果たした（表1：83, 84）。

以上からみて、「術」から「道」への移行過程で「道」を採用する理由に言及した人物は、坂口、永井、西久保の3名だけであると考えられる。

もちろん、抽出した資料中には、題名に「剣道」を加えた雑誌記事や「剣道」を冠した図書もある。そこで、つぎに、この3名を考察する前に、これらの図書と雑誌を検討する。

III 「剣道」論文の用語と用法

1. 編集者の場合

明治31年の「剣道」(表1: 10)の前書きに「剣道の振興に最も力を尽くされたる、故従三位子爵河田景興氏の、剣術の無形的に必要なことを述べられたるもの」とあるように、この時期に書名や雑誌記事の題名に「撃剣」「剣術」でなく「剣道」を用いた例(表1: 25, 32, 81)は多い。

その中には、雑誌表紙の目次に竹刀術の名辞を「撃剣」「剣術」「剣道」から択一して「剣道界」欄を設けたり(表1: 32)、編集者が「撃剣部」教師を「剣道教師」と書き直したり(表1: 33)、あるいは、本文の著者肩書の「剣術科教士」が目次では「剣道教士」とされた例(表1: 50)等が見られる。これらは、当時の雑誌編集者が読者の関心を惹くために工夫した表紙記載の常套手段であった。

しかし、内藤高治の場合、目次題名と本文主題は「剣道初歩」であるが、本文副題には「剣術講習初学者に示す」とある(表1: 28)。文中では、「西洋剣術」と対比して「我朝剣道の基因は…遊戯に初まりたるに非ず」(p. 49)と「剣道」を用いた他は、すべて「剣術」である。これは、編集者が、著者内藤の題名を副題に下げて、「剣道初歩」を主題に書き加えたからであろう。

内藤の「剣道修業に就ての心得」(表1: 56)の場合も、1回だけの「剣道講習」以外は、全て「剣術」「剣法」であるから、編集者が「剣術修業」を「剣道修業」に書き直したことは明らかである。

「宮本武蔵著、三橋鑑一郎註」とある『剣道秘要』(表1: 46)は、書名に「剣道」を用いた最初の図書である。三橋は明治42年3月死去であるから、「剣道」使用の同年9月付「例言」も、書名の「剣道」も、編集者によるものであろう。

なお、「(剣)術」から「(剣)道」への移行は、大正7年には弓術界にも波及した。書名に「弓道」を用いた最初は『現代の弓道』(表1: 81)であるが、その目次には、「弓道」はなく、すべて「弓術」を用いている。これは、出版社が書名に

「弓道」を先取りしたことを意味する。

以上のように、明治38年日露戦争の大勢が決した頃から本格化する「(剣)術」から「(剣)道」への移行は、編集者によって、すでに明治30年頃から先取りされていたのである。これは、大正4年の高野佐三郎の「剣道」は「最近二三十年以来の事」という回顧(表1: 80)と一致する。

2. 柳多元治郎の場合

柳多の明治42年「剣道教授綱目」(表1: 45)は「竹刀木刀は武士の魂とする処の日本刀に模造せしものにして道具は武士道を錬磨する唯一の武器」と述べて、竹刀木刀を用いる教授の目的を「其精神を鍛錬し其の身体を健全にし本邦特有の武士道を涵養して大和民族の本分を尽くすにあり」とする。柳多は、竹刀木刀を用いる教授の目的に武士道的精神を掲げて、「剣術」ではなく「剣道」を冠したのである。竹刀木刀の操法を教授するのであるから、その上達を度外視した教授はあり得ない。当然、操法上達の程度を知る「試合」と「審判」の指針が示される。これは技術の問題であるから、その主語には、目的に技術を掲げない「剣道」よりも、技術を謳った「剣術」がふさわしい。ところが、柳多は、「剣術」を用いずに、「試合中目前の勝負のみを争ひ卑劣の挙動を為し武人の体面を汚す可らず」、「精神修養に重きを置き技術上の勝敗は成る可く決せざる方可とす」と、精神を強調して技術主義に陥ることを戒める。

柳多は、竹刀木刀を用いる教授の技術主義的弊害を是正するため、技術的表現である「剣術」の使用を避けて、武士道的精神を強調する語感の「剣道」に置き換えたのである。

しかし、彼は、「撃剣」「剣術」を「剣道」に置き換えた理由に一言も触れていない。

柳多の『剣道教範』(表1: 62)には、次の記述がある。

案ずるに撃剣の文字は、剣道諸流の伝書の中に見へず、維新以前は普く剣法、剣道、剣術の称呼を以てせり、蓋し興行を創むるに際し、剣道の名称を憚り改称せしものならんか

(p. 12)

現今青年の演ずる所の撃剣に至りては、真剣に違ふ所の長竹刀を振り翳し跳び廻るを常とす、何たる児戯ぞ、之れを以て本邦固有の武術と為すは誤れるの甚しく… (p. 20)

維新後の輦轡を買うような竹刀競技に「撃剣」を充てたのであるから、柳多が「撃剣」を忌避したことは分かる。しかし、「剣術」を避けた理由にはならない。

ともかく、柳多は、理由を述べずに、感覚的に「(剣) 術」に替えて「(剣) 道」を用いた最初の人物ということになる。

3. 小関教政の場合

明治43年に「武徳会山形県支部剣道教士」の肩書で著した小関の『剣道要覧』(表1: 55)は、「剣道」を冠した2番目の図書である。

小関は、緒言の戊申詔書(表1: 37)を模した「我が神聖なる武道の成跡」(p. 2)という時代を意識した総論的叙述では「剣道」「武道」を用いる。しかし、「道」が出て来るのは、本論最初の見出しの「剣道大意」迄である。その書き出しの「夫れ兵法は心の妙徳也」(p. 1)以降は、「剣道」ではなく「兵法」を用いているし、「試合の事」(p. 15—)からは、「柔道と剣術」(p. 36)を含めて、すべて「剣術」を使用している。また、「武道の蘊奥を極めんには道理に暗くては技術に長ずるも其功なし」(p. 15)と、「術」だけでは「道」に到達できないことを指摘する。

したがって、小関が「術」と「道」とを次元の異なる非連続の別概念と認識していたことは明らかであるから、小関は「術」から「道」への移行と無関係であったと考えられる。

以上から、以下の2点を指摘できる。

①「(剣) 術」から「(剣) 道」への移行は、すでに明治30年頃から編集者によって始まり、本文中で使用される主な用語如何に拘わらず、題名に「剣道」を採用した例は多い。柳多の場合も、編集者と同様の認識で「術」から「道」への改称を実践した。しかし、彼らからは、「術」から「道」への改称の論理を見出すことが出来ない。

②小関の場合は、移行の趨勢を意識して「道」を使用した、「術」の概念をも必要とした。したがって、彼が「術」から「道」への移行に関与したとは考えられない。

最後に、坂口、永井の「剣道」、西久保の「武道」採用理由を明らかにし、「術」から「道」への移行に占める3人の意義について考察する。

IV 「剣道」提唱者と提唱理由

1. 坂口鎮雄の場合

坂口は、明治37年(推定)入学の早稲田大学「撃剣部」主力部員(無記名, 1905. 無記名, 1907)で、「剣道部」を自称していた(表1: 23)。執筆者や発行所(表1: 25)から考えて、早稲田色の濃い『運動之友』に掲載された「余が剣士としての経験」(表1: 16)によれば、坂口は、明治35年、武徳会熊本支部の情実人選によって、熊本県立済々黌卒業を前に、京都本部での修業の機会を奪われたことから、信じていた「剣術」界に疑念を抱くようになった。卒業後、「之を遺恨」とした父が京都へ出してくれたので、より強い「剣術」を志して内藤高治(前述)に師事したところ、内藤の「独り剣道に於ける偉人ではなく、広く漢籍に通じ、孔孟の教へを説き、其の高潔なる品性」に感化されて、「剣術」でなく「剣道」を目指すべきであると自覚したという。

坂口は、この内藤への師事の話に境に、文中での用語を「剣術」から「剣道」へ替え、「剣道に志す者」の要件を、次のように指摘する。

第一高潔なる品性を持つ可き事であります。又敏活なる挙動をなす可き人を要し、物に当りて益々猛進す可き勇氣ある人を要します。(p. 52)

坂口は、「剣道」を、竹刀術という可視的側面である「剣術」と、品性と敢為の勇氣という人格的側面からなると認識し、「剣道」を「剣術」の上位概念に位置づけたのである。

彼が「剣道」を標榜していたことは、明治39年春の早稲田大学体育部主催優勝各部祝勝会での答辞で、成文上の「撃剣部」ではなく「剣道部総

代坂口」と名乗ったこと（表1：23）に明らかで、「当大学へ入校し、学業の傍ら熱心に斯道を研究しつつありますが、此の東京の剣道界に於ては、確かに他地方のものと異なり」（p. 52）には、「剣術」を含む「剣道」の実現を東京の学生剣道界に期待していたことが窺える。

明治39年末開催の「東京学生連合剣道会第1回大会番組」（表1：26）をみると、竹刀試合の番組と何ら異なるところはないから、この「剣道」は「撃剣」の読み替えに過ぎず、坂口の標榜する「剣道」の一部分に過ぎないことになるが、一部の学校で始まった「剣道部」への改称の趨勢を背景に、ともかく「剣道」が代表的用語としての座を認知された最初であると云えよう。

坂口は「私設剣術道場に就て」（表1：29）でも、次のように「武道の師」を肯定的文脈、「武術教師」を否定的文脈の用語として使い分ける。

今日武道の師となるべきものは単に剣道の技のみならず多少時代の如何を知り又世界の大勢に就てもセメテ其一端を看取するの能力を有し且又普通学理の大体位^{ママ}には通ぜざるべからず、吾人は斯道の為め世間往々武術教師の品性心術に就て将た平常不断の行為に於て頗る多くの欠点を有するものの比較的少なからざるを目撃して真に遺憾を感じずるものである。（p. 76）

このような「剣道」と「剣術」についての認識が、「剣道講話」（表1：34）の冒頭での、つぎのような坂口の「剣道」の定義となったのである。

剣道とは、剣を使用するには如何にすべきやと云ふ方法即ち剣を用ふるの術及び之れを用ふるには其の人格を如何なる方向に発展せしむべきや、即ち其の徳性は如何と云ふを、教へ導くにあり。（p. 47）

この定義の後には、「単に剣術と称せば剣を用ふるの術を修むれば足れりとの感を生じ、又世俗の撃剣なる語源は…」と続く。

したがって、坂口の「剣道」には、「剣術」「撃剣」と呼ばれる竹刀の技術と「人格」「徳性」「品性」「勇氣」のような人格とが不可欠であったから、「剣道」は「剣術」「撃剣」の上位概念であっ

て、「(剣)術」に替えて「(剣)道」と改称できるような同次元の概念ではなかったのである。

したがって、坂口は、可視的な「剣術」にはない精神性の価値に注目した「剣道」の提唱者ではあるが、「剣術」を否定したわけではなく、「剣道」の一部に「剣術」を認めているのであるから、「剣術」から「剣道」への移行と関わりのないことは明らかである。

2. 永井道明の場合

高師では、嘉納校長のもとで、まず「柔道」が地歩を獲得し（表1：3）、遅れて「撃剣」が加わったため、常に「柔道」優先であった（表1：7, 8, 12）。このため、内心では武芸の筆頭を自負する「撃剣」関係者の念頭に、「柔道」と対等の地位に立ちたい想いがあったことは否めない。

とくに、「柔道」は「柔術」を改称して近代化に成功している（木下、1970）から、「撃剣」から「剣道」への改称は、高師では「柔道」と比肩する方便の一つになり得たし、東京の学生間には「剣道」改称の気運が高まっていたのであるから、明治42年の「撃剣部」の「剣道部」への改称（表1：39）、43年の教材名変更（表1：49, 54）には、改称理由を説明する必要はなかったと考えられる。

しかし、文部省が教材名に「撃剣及柔術」を採用する（表1：57）と、高師は、師範教育の総本山の面子から、自校採用の教材名「剣道」「柔道」の正当性を主張しなければならなくなり、当然、体操科主任の立場にあった永井（表1：40）が、その理論的説明をせざるを得なかった筈である。

以上のような事情を背景に、明治42年には「撃剣」を用いていた永井（表1：44）が、明治44年文部省講習会で担当した講義「体育理論」（表1：64）中で、文部省が採用した「撃剣」という教材名を「剣道」に替えなければならないと講義したのである。

永井は、その理由として、体育（身体教育）目的の体操が技術主義化したことへの反省と、技術偏重の「撃剣」を正課で実施することに関する危惧を挙げ、対策として、「撃剣」実施の目的が技

術でなく精神にあることを視覚的に強調する方便として、形而下の技術を印象づける表現である「撃剣」を忌避し、剣をめぐる精神的価値を連想させる形而上の表現である「剣道」の採用を提起したのである（木下，2005，p. 23）。

技術偏重の是正と精神重視が本旨であるから、本来ならば教育内容や教授法の問題として解決すべきであろう。「撃剣」を「剣道」と置き換えることで、多少の意識改革は期待できるであろうが、教材名という看板にキャッチフレーズを採用した位で、技術偏重の是正と精神重視とが実現すると到底考えられない。事実、永井自身も危惧していた（表1：78）。

したがって、永井の提唱は、「撃剣」から「剣道」への名辞（記号）の書き換えに過ぎない。

しかし、高師体操科主任永井が、「撃剣及柔術」採用後の最初の文部省講習会で、「撃剣」に替えて「剣道」と改称せねばならないと講義したことの学校現場に対する影響力を考えれば、「撃剣」「（剣）術」から「（剣）道」への移行は、永井によって完全に軌道に乗ったと云える。

3. 西久保弘道の場合

大正3年、警察練習所における「武道講話（二）」（表1：74）で、西久保警視総監は、「其の名称に於て、術と云ふ様な語を用ひたとすれば、武と云ふものは全く術に過ぎないものであると云ふ様な考が、容易に起こって来る」から、「術といふ言葉を避けて、特に高尚にして且つ又武道本来の目的に適合する道」を使うべきであると主張した（p. 13）。

西久保は、技術偏重の是正を、「術」の替わりに「道」を用いることに託したのである。

これは、学校を対象とした永井の改称論を警察の分野、すなわち学校以外へ広げたという意味での意義はあるものの、永井の改称論の域を出るものではない。

しかし、大正8年、西久保が武徳会の要職に就く（表1：82）と、武徳会は「武術」を「武道」と書き換える（表1：83，84）。「術」の字を以てしては形而下の技術に^マ遍し最も尊重すべき斯道の真

髓たる其の精神を逸するの虞あり」という改称理由説明は、西久保の改称論そのものである。

したがって、西久保の「（武）術」から「（武）道」への改称論は、永井の改称論の複製、二番煎じに過ぎないけれども、西久保が武徳会での改称を実現したことによって、「術」から「道」への移行は事実上完結したことになる。

結 論

「撃剣」「剣術」から「剣道」への移行の歴史を整理すると、以下ようになる。

①明治20年代には始まっていた技術偏重の竹刀術「撃剣」に対する批判は、明治30年頃になると「撃剣」ひいては「剣術」の名辞の忌避となって、名辞に「剣道」を充てる気運を生じ、日露戦争後になると、部名改称の形で「（剣）術」から「（剣）道」への移行が本格化した。

②明治28年設立の武徳会は、「道」を「術」よりも価値ある存在と位置づけていたから、「術」から「道」への移行に主導的役割を果たすことはなかった。

③坂口鎮雄は、移行本格化の初期段階で、技術偏重の可視的な「剣術」の他に、「剣術」だけからでは得られない精神性の必要を認め、両者を合わせた理想を「剣道」と捉えて、この意味での「剣道」を標榜した。したがって、彼の「剣道」は「剣術」の上位概念であるから、「術」から「道」への移行はあり得ない。しかし、彼が標榜する「剣道」という名辞は、「撃剣」「剣術」を嫌忌する学生らにとっては、時宜を得た名辞であった。したがって、彼の「剣道」が日露戦争後の学生による「剣道部」改称を推進した可能性は捨てきれない。

④高師は、学生による「剣道部」への改称の趨勢下で、明治42年に「撃剣」を「剣道」と改称して、名辞の面で「柔道」と肩を並べた。したがって、明治44年、文部省が「撃剣及柔術」を採用した時点では、師範教育の総本山の威信に賭けても、「柔道」「剣道」に固執しなければならなかった。固執するためには、相当の理由付けが必要

となる。

⑤この理由付けをしたのが、明治44年、最初の文部省「撃剣及柔術」講習会で、「撃剣」の名辞を「剣道」に置き換える必要を講義した永井道明である。講習会の権威を背景とした彼の提唱によって、「(剣)術」から「(剣)道」への移行が軌道に乗ったのである。

⑥「(剣)術」から「(剣)道」への移行の過程で見逃せないのは、文部省講習会を機に顕在化した学校剣道をめぐる高師対武徳会の主導権争いである。その結末は、大正元年、武徳会「剣術形」を「剣道形」に書き換えさせた高師の制覇に終わり、以後、「術」から「道」への移行を妨げるものはなくなったのである。

⑦大正3年、西久保弘道提唱の「武術」から「武道」への移行は、永井の二番煎じに過ぎない。しかし、これを学校外へ広げた意義は無視できない。さらに、彼は、大正8年、武徳会における「術」から「道」への移行を完結させた。これによって、約15年間の長期にわたる「(剣)術」から「(剣)道」への移行は、事実上の終止符を打たれたのである。

⑧したがって、「術」から「道」への移行過程で最も重要な役割を果たしたのは、永井による明治44年の「撃剣」に替えての「剣道」の提唱であり、西久保に認められる意義は、移行に終止符を打ったことであると結論する。

⑨加えて、「(剣)術」から「(剣)道」への移行が、単なる名辞の変更に止まって、竹刀術そのものの変革を伴わなかったことが、その後の現在に至る精神重視を建前に競技主義を本音とする「剣道」の出発点であったこと、坂口が描いた「(剣)術」と「(剣)道」との関係での、実をともしなう「(剣)道」への移行ではなかったことを指摘したい。

注

注1)「(表1:2)」は、表1の事項番号2に照応することを示す。その出典は、[表1. 出典] (pp. 38-39) に同一番号で示した。以下同じ。

注2) 明治43年1月付頒布「武徳学校設立趣意」(武徳会誌3:70-71)には「師範部の卒業生は武術の教師たるの外学科に於ても中等教育の教師たる資格を得さしめんとす」とある。

文 献

井上正孝(1986) 剣道はこう学べ：その理論と実際。玉川大学出版部：東京，pp. 14-16.

木下秀明(1965) 大日本武徳会：その前近代性と近代性。体育の科学，15 (11)：643-645.

木下秀明(1970) スポーツの近代日本史。杏林書院：東京，pp. 32-33.

木下秀明(2005) 「撃剣」「剣術」から「剣道」への移行過程に関する検討：『文部省第1回撃剣講習会』の分析。体育学研究，50 (3)：271.

無記名(1905) 剣道部近事。早稲田学報，118：64.

無記名(1907) 早稲田大学坂口鎮雄君と早稲田中学高橋利和君の立合。運動之友，2 (2)：口絵.

中村民雄(1985) 史料近代剣道史。島津書房：東京.

中村民雄(1994) 剣道事典：技術と文化の歴史。島津書房：東京，pp. 13-14.

中村民雄(2003) 近代剣道小史：近代剣道書選集別冊解説。本の友社：東京，p. 15.

杉山清作(1912) 心身鍛練 文部省第1回撃剣講習録.

杉山清作：埼玉県児玉郡永幡村，p. 一.

早稲田大学史編纂所(1981) 早稲田大学百年史2。早稲田大学：東京，p. 562.

(平成17年3月9日受付)
(平成17年6月25日受理)